

バイオリージョナリズムに基づく上賀茂地域の活性化を目指した環境学習の展開

京都産業大学理学部 正会員 勝矢淳雄

1. はじめに

古くから続いている地域には多くの伝統行事・伝統文化が引き継がれてきていることが多い。1300年以上の歴史を有する上賀茂地域にも多くのものが現在に至るも存続している。上賀茂神社の神官（社家）の屋敷があった明神川沿いの社家町は遅くとも15世紀中頃には門前集落として発達したといわれ、少なくなったが今でも社家屋敷群が維持されている。今では全国的にも珍しくなり、昭和63年には国の重要伝統的建造物群保存地区（伝建地区）に選定され、町並みの保存がはかられている。さらに、社家町の周辺地域も平成9年に京都市から界わい景観保全地域に指定され、より広く地域の環境保全に力を入れている。

しかし、時代の流れには抗し難く、都市化の進展と共に地域に無関心の層も増加し、また一方で古くからの地域住民は新しい住民を地域の集団の中に取り込んでいこうとする雰囲気は積極的とは感じられない。このような中で、徐々に古くからの伝統行事・伝統文化が危機に瀕するようになってきている。書の賀茂流、木目込み人形の賀茂人形は既に古くに途絶えており、六斎念仏もいつの間にか消失した。現在は紅葉音頭やさんやれ祭の存続が危ぶまれている。上賀茂の文化の保全・継承のためには、従来と同様の形態で親から子へ地域の従来の絆を基に引き継いでいく努力と共に、地域の文化を形のみならずその意義について新しい層、とくに若年層の住民に関心を持ってもらい、地域の担い手として育ててもらうことが急務である。

以上のような状況から、地域への関心を高めてもらえるように、地域にある環境資産を利用して地域の子供、大人とくに若年層を対象に種々の環境学習を地域住民と協働して試みた。上賀茂の伝統文化の保全・継承を目的に地域内外の方々と設立した賀茂文化研究会を基盤として活動した。

2. 地域の状況

安永年間（1772～81）には上賀茂地域に148戸の社家屋敷があったが、現在残されているのは20数戸で、そのうち昔の面影をある程度残しているのは10数戸である。4戸は京都市の指定（あるいは登録）文化財として保存にも配慮されている。住宅と農家が主で、観光を商売としているところはほとんどないため、観光客など他所の人たちが地域に来ることに根強い拒否反応があり、伝建地区では「ここは何もしないところ」との申し合わせもある。1300年以上の伝統をもって居住する人達から、新しい居住者までいる上賀茂地域、明治以降の居住者ですら未だに「入り込み人」あるいは「入り人」と見られるこの地域では旧来の複雑な人間関係、身分制度（社家、農家、その他）が暗黙の内にも続いており、それが地域の共生を難しくしている。新しい、とくに若い居住者は古い伝統文化には関心は薄く、またそれに伴う人間関係には入り難い雰囲気もあるのも事実である。小学校のPTAを基盤とした活動は活発に見られるが、従来の伝統行事などとはとくに繋がりは見られない。このような状況において、地域の子供、大人とくに若年層との環境学習の協働については、上賀茂小学校PTAの自由活動の団体である上賀茂探検クラブを対象とした。探検クラブを協働の対象とした理由は、探検クラブが上賀茂地域の自然や文化を子供と大人が共に学ぶことをその趣旨としていることで、その目的が一致していること、広く子供たちを集められる有力な組織であることからである。

3. 環境学習活動

1) テントウムシの観察会

地域の温度条件によって、ナミテントウの斑紋の優先順位が異なることが認められている。上賀茂地域でも優先種が温暖地域に適する種類に変化してきていることが長年の調査で分かってきた。地球の温暖化と地域の都市化による影響と考えられる。子供達と保護者で実際にナミテントウを採取し斑紋を調べることで、

キーワード：地域の活性化、上賀茂、社家町、地域連携、環境学習、バイオリージョナリズム

連絡先：603-8555 京都市北区上賀茂本山 36 Tel. 075-705-1637 Fax. 075-705-1640

身近で実際に温暖化の傾向を体験することが出来る。賀茂文化研究会が中心となり、ナミテントウの調査をしておられる京産大のN先生に指導を頼み、参加する地域の子供達と保護者は上賀茂探検クラブに声を掛けた。5月14日に、小学校で説明の後、賀茂川の河川敷で観察を行なった。子供24名、保護者16名と大学関係者5名の合わせて45名であった。保護者からも身近なところでも温暖化の傾向を知ることができ貴重な体験であったと好評であった。

2) 社家屋敷の見学会

上賀茂の社家町は国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されているが、個人の所有であるため社家庭園が1軒のみ公開(有料)されているだけで、建物の公開されているところは無い。そのため、外観は見られるが内部まで入って見せてもらえるところがなく、地域に居住する人達にとっても馴染みの薄いものとなっている。地域にある貴重な資産が地域で有効に生かされることもなく、むしろ子供達はいたずらをするとして嫌われる傾向にもあった。平成13年度から、このような状況を改め地域で積極的に子供達を受け入れ、地域にいい思い出をもってもらい、地域の将来の担い手として育てていくべきであるとの考えから、社家屋敷の見学会をはじめた。地域の理解がなかなか得られず長年苦勞していたが、17年度からは上賀茂探検クラブの行事の一つとして実施することとなり、地元に着定させることが出来た。6月25日に子供達20名、説明と付き添いの保護者11名と大学関係者3名の合わせて34名で、2グループに別れそれぞれ3軒の社家屋敷を訪問し、好評に終了した。



3) 七夕祭

江戸時代に行われていた上賀茂神社の七夕祭は途絶えて百数十年になるが、既に当時の様子については分からない。夏休みに子供達と大人も合わせて楽しみ、神社のある上賀茂に親しみを持ってもらうために、神社と共に主催し上賀茂探検クラブとも協力して七夕祭を新たな装いで復活した。当日の8月13日は生憎の小雨と曇りとなった。地元の天文を専門とする方に指導を頼み、力を入れていた月のクレーターの観望会は出来なかった。一部の行事は中止となったが、火縄銃の実演、子供達の乗馬体験、よさこい踊りなど多くの人達が夜まで楽しんだ。本年は、自治連合会との協働で上賀茂祭と一緒に開催する方向で進んでいる。地域の子供、大人が従来の垣根を越えて集まれる催しとなる予定である。

4) 二葉葵の森の復活

上賀茂神社の神紋は二葉葵であるが、境内に双葉葵はほぼ自生していない。双葉葵を境内に復活させると共に、神社と地域の協働による復活運動を通じて子供たちの環境学習と出来ないかという相談が神社のM氏から賀茂文化研究会になされた。地域内外の多くの方々の賛同を得て、実行委員会（5名）を立ち上げ、賀茂文化研究会から2名が参加して、上賀茂小学校などに働きかけ実現に向けて活動しだしている。地域の中から今までと異なる集団から新しい動きが芽生えだしてきたこと、および賀茂文化研究会が地域での活動の相談相手として認識されるようになってきたことが大きな成果である。

4. おわりに

種々の活動を通じて長年にわたり地域の方々との信頼関係を築いてきたこと、良い協力者が得られだしたことが成功できた理由である。地域のことに貢献しながら研究も進めていることへの理解が得られだした結果といえる。上賀茂は伝統ある地域であるが、形骸化した町並みや事物を消極的に残すのではなく、地域の人々の中で活きた町でこそ本来の意義ある地域の保全・継承である。それゆえ、単に環境学習を進めるだけではなく、自然生態系や地域の文化・歴史をも見直し、積極的に新たな文化を創造していこうとする情熱を地域住民に抱いてもらうことが大切であり、そのための一環としての活動と位置づけている。賀茂文化研究会の活動の一部であり、財団法人トヨタ財団の助成を受けて進めている。記して感謝する。